山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第5号(1994.3)

中学校における障害者スポーツに迫るセミナー学習での試み

大本 学司*

Trial of the Seminar Learning on ‘Sports for All Disabled People’ in the Secondary School

Gakuji OMOTO*

(Received November 19, 1993)

キーワード：協合学習，セミナー学習，障害者スポーツ，共生

1．はじめに－教育課程の中でのセミナー学習の位置づけ

本校では、教育課程の中に、いわゆる教科学習および教科外活動とならんで「協合学習」という学習場面を設定している。これはセミナー学習、学園祭学習、校外学習の３つの学習から構成されており、それぞれの学習におけるさまざまな活動場面の中で、子どもたちが自分の興味・関心にしたがって学習課題を設定し合い、それの解決に向けて自主的に学習計画を立てて実践し、相互に成果を交流・評価し合っていくことがめざされている。一言でいえば「違った考えや気持ちなどが、一つにとけ合っていく場面を持った学習」がそこで意図されている。

そうした「協合学習」の中にあって、異年齢の集団で互いに学び合うのが、ここに報告をするセミナー学習である。これは、従来のいわゆる正課クラブに代わるものとして導入されており、そこでは教師が教科専門性を生かして２０あまりのユニークなテーマからなる講座を設定し、その中から子どもがそれぞれの学習興味にしたがって選択し、学年を越えた異年齢集団で学習に取り組むというものである。１年間を前期・後期に分け、子どもたちはそれぞれの期で自分が興味・関心を持ちうる講座を選択する。セミナー学習には、前期・後期ともに８時間が設定され（したがって時間と時間との間隔がゆったりと確保さ

＊ 山口大学教育学部附属山口中学校

れている）、その時間の中で子どもたちは、自己の興味や関心をさらに深く追究したり、グループで同じ課題を協力・分担し合いながら解決していく。また校外に出て地域の人々とじかに触れ合うことで先人の知恵に気づいたり、地域のあり様をリアルに摑み取ったりするようにもなる。

以下では、「障害者スポーツを考える」というテーマのもとに取り組んだセミナー学習について実践報告をおこない、そのなかで、障害者スポーツに対する中学生の見方・考え方とその変容過程について考えてみたい。

２．セミナー学習：「障害者スポーツを考える」を開設した背景

初めに「障害者スポーツを考える」というセミナー講座を開設するに至った背景およびこのテーマに託した思いから述べておきたい。本講座は９２年の後期に新設し、引き続き９３年前期と連続して開設した。テーマ設定の動機には２つの意図・願いがあった。

一つは、子どもたちがほとんど知り得ていない「障害者スポーツ」に触れさせ、身近な存在にしたいという意図である。講座を新設した９２年は、世界中の人々が注目したバルセロナオリンピックが開催された年である。スポーツを愛好する者にとって、オリンピックというイベントは最大の関心事であり、まさにスポーツの祭典である。あらゆるマスメディアはバルセロナに注目し、テレビ、ラジオ、新聞などでは私たちにその情報を余すところなく伝えてくれた。テレビのスイッチを押せばいつも新鮮な情報が流されており、チャンネルを替えても、これでもかというぐらいに同じ場面を放送したりする。つまり、知りたいことが茶の間にいてもテレビというマスメディアを通じて十分なくらいに知り得ることができたのである。

ところが、このオリンピックが開催された同じ年に、同じ場所で開催される障害者のためのスポーツの祭典、いわゆる「パラリンピック」のことについては、ほとんど知られていないというのが現状ではないだろうか。実際に本校の子どもたちにそのことについて尋ねても、知っていると答えた者はほんの数人という状況であった。

バルセロナ大会の開会前はもちろん、開催中にあれだけの情報を私たちに流し続けたマスコミも、もう一つのオリンピックである「パラリンピック」については、私の知る限りではテレビのニュースで開会式の様子を映し出したほかは、わずかに特集で報じる程度であった。このギャップは一体何であろうか。私自身が素朴な疑問を持った。と同時に、子どもたちがほとんど知り得ていない「障害者スポーツ」をまず身近な存在にしたいと考えたのである。とは言うものの、私自身にもまったくと言っていいほど「障害者スポーツ」についての知識はなく、この機会に子どもたちと一緒に勉強してみたいという思いからの出発だったのである。

さらに、このテーマ設定にはもう一つの大きなねらいがあった。それは、障害者も健体者も共に生き、共にスポーツを楽しみ、日々の生活をより豊かにしていくという社会を築くためには、中学生として何ができるだろうかを考えさせてみたいという願いからである。「人は誰もが等しく、能力に応じて働き、学び、スポーツを楽しみ、健康で文化的な生活を送る権利がある」。これは子どもたち誰もが認め、当たり前のこととして受けとめている。しかし、現実の生活において、この理念がどれだけ生きているだろうか。そのことを子どもたちに投げかけ、とりわけ彼らにとって身近に考えることができるスポーツを素材

として取り上げることによって、「障害者にとってスポーツとは何か。健体者である自分たちと障害を持つ人々が共に豊かに暮らしていくために自分にできることは何か」をスポーツという窓口を通して考えるきっかけにしたいという思いから本講座を開設することにした。

3．実践とその考察

1）学習計画

前期・後期ともそれぞれ４回のセミナー学習が計画されており、１回が２時間続きの学習時間となり、計８時間が保障されている。したがってこの８時間の時間で子どもたちはひとまとまり（単元）の学習をすることになる。今回の後期（９２年度）と前期（９３年度）の学習計画は、おおよそ同じ構想で学習を仕組んでおり、次のように展開した。

以下、それぞれの学習場面で子どもたちが見せた姿を紹介しながら、考察することにする。

回	学習内容・学習活動
1	・このセミナーに寄せる思いを語る ・資料「障害者にもスポーツのよろこびを」を読んで
2	・冊子「障害者スポーツ」を読む ・障害者のためのスポーツを考えよう
3	・文献調査 ・市役所、県庁の福祉施策調査（訪問・聞き取り） ・自分たちで考えた「障害者スポーツ」をやってみよう
4	・これまでの学習を振り返り、まとめる（意見交流・冊子づくり）

2）講座選択に寄せる子どもの思い

本セミナーを選択した子どもは、９２年度後期では、１年男子１６人、２年男子２人、女子３人、３年男子２人の計２３人。９３年度前期では、２年男子１４人、３年男子１人、女子３人の計１８人で、このうち２度連続して受講した子どもは１人という状況であった。ある子どもは本セミナーを選択した理由について次のように書いている。

いつも普通に部活や体育の授業をしているけど、もしからだの一部分が動かなくなったらどれだけ苦労をするのかや、障害者の人たちはどのようにスポーツをしているのかを知りたいから。

テレビなど実際に障害者スポーツをみて障害者の人たちが一生懸命にやっているのをみて、すごいなあと感動したので・・・。

２０いくつかの講座から自分の意志で選択するのであるから、子どもの思いは「ただ何となく」というものではなく、ある程度は明確なものである。「なに不自由なくスポーツを楽しんでいる自分が、もし障害者という立場になったときどんな苦労があるのか」という思いは、実際の生活と切り結んで、このセミナー学習を捉えていることの表れであろう。また、「実際に障害者が一生懸命にスポーツをする姿に感動した」という思いも、中学生という多感な時期に受ける、美しいものに感動するという素直な感情であろう。このように、子どもの思いはかなり前向きなものと捉えることができる。

３）学習の切り込み口としての共通の学習から

さまざまな思いを抱いてこの講座を選択した子どもたちに対して、まず学習の切り込み口として共通の教材となる２つの資料を提示した。一つは「障害者にもスポーツの喜びを」（芝田徳造，体育科教育, 1987年10月号）であり、もう一つは「障害者スポーツ－京都の挑戦」（芝田徳造，かもがわ出版, 1989年）である。特に後者についてはセミナーの予算で一人に１冊ずつ渡るように手配でき、とても有効なものとなった。

冊子には、障害を持つ人たちが懸命に走ったり、泳いだり、バスケットボールや野球を楽しんでいる姿が写真で紹介されていたり、その活動を支えるボランティアの人々の思いが紹介されており、子どもたちにとって心打たれる教材となった。子どもの感想をいくつか紹介する。

障害者が懸命に競技する姿がとても印象に残った。僕は「なぜ、この障害者の人たちはこんなに競技できるのだろう」と最初は思っていたが、後になって、この人たちは「生きる」ことを喜んでいるのではないかと思った。そして、「健康な人々と障害を持った人々は同じ人間なのだ。同じ世界に住めるのだ。」と強く思った。（２年男子）

健体者でも障害者でも大会に向けての意気込みはぜんぜん変わらないところとか、私には障害者がそういう希望を持っていてくれるということがすごくうれしいです。私はボランティアがしたいです。しかし、障害者を目前にした時、私はどういう態度をとれるのかということが心配です。私の接し方で相手はすごく傷つくと思います。どれだけ相手のことが分かるか不安です。私はボラン

ティアをしている人は素晴らしい人だと思います。（2年女子）

もし、自分が障害者になったらということを考えると、まず絶望するだろうと思うが、この冊子にでてくる松本秀樹さんのように、絶望から希望を見い出して、ついに自分自身の生きる力を得たという事実にはとても感動した。健体者と障害者が同じ社会の中で生きていくこと、共に支え合い、互いに理解し合うことの大切さをあらためてしみじみと感じた。この、障害者にとって大きな夢でもあり希望でもあるスポーツを通して、自分も間接的にでもできる限り障害者を支えていきたいという考えを持つようになった。（3年男子）

この感想の中に出てくる松本秀樹さん（２０才の時の事故で、両腕と片足を切断、片足と胴体だけのドルフィンで２５ｍを泳いで金メダル）のことについては、芝田氏がその著「スポーツは生きる力」（民衆社，1986年）の中で、生きる勇気を与えたスポーツ－障害を持つ人々・家族の証言－として紹介してあったので、その部分を朗読した。障害者のスポーツに対する思いを知ることで、子どもたちにとって「障害者にとってスポーツとはいかなるものか」を考える大きな指針になり得たのではないかと思っている。

こうして、共通の学習を進めた後に、各自がそれぞれ興味を持ち、取り組んでみたいことを自分の課題として、個人またはグループでの学習へと発展させていった。大きくは、障害者のためのスポーツを考え実践するグループ。実際に自分たちの住んでいる地域で「障害者スポーツ」がどのように実施されているのか、その施策状況を市役所や県庁に出かけていって調べるグループ。文献などでさらに詳しく「障害者スポーツのあり方」について調べるグループの３つである。

以下、それぞれの取り組みを紹介することにする。

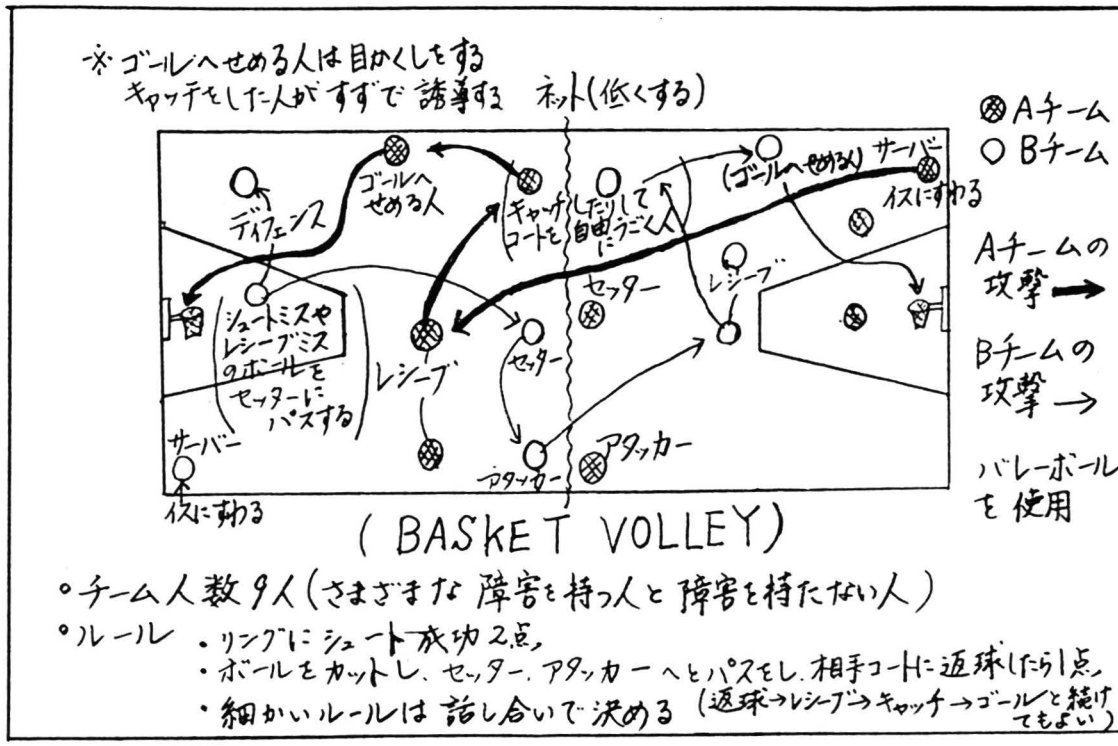
4）子どもによる調べる学習への取り組み

①障害者のためのスポーツを考え実践するグループ

まず、現在行われているスポーツをヒントに実際に体験してみることから出発した。ソフトバレーボールに鈴をつけ、目隠しをし、ラケットをバットにして野球をすることに挑戦した。守る側も目隠しをし、鈴の音を頼りにボールを追うことにした。バッターはタンバリンの音で誘導されて走る。転がってきたボールを摑み頭上に上げたらアウトになる。

実際にプレーしてみて初めて、目が見えないということがどんなに不自由なことかがわかり、障害者の思いに少しでも触れることができたようであった。この他、片手を縛った状態での片手バスケットや椅子に座っての卓球などをプレーすることにより、障害者の人たちの気持ちに少しでも近づいてみようという思いが見られた取り組みであった。

このような取り組みを経て、ある子どもが、健体者も障害者も一緒にコートの中でプレーできるスポーツとして「バスケットバレー」なるものを考案した。そして彼はその時の思いを次のように書いている。



障害者の人が持つ悩みとは何だろうと考えた時に、自分が特別扱いされて、いたわられるのが嫌だという人がきっといるだろうと思う。それは、自分が障害者になったと仮定して考えてみると、「一人の人間として自立したい。堂々と生きたい」と思うから。あまりにも特別扱いされると、社会からどんどん隔離されるような気がして、まるで自分が普通の人間ではないみたいだと障害者の人は思うだろう。「かわいそうと思うことが一番かわいそうなんだ」という話を聞いたことがある。また、福祉大学にいっている人が「車椅子の人を街へ連れて行くんではなくて、一緒に買い物をするんだ」と言っていたのを聞いたことがある。つまり同情してばかりいるのではなく、同じ人間なんだという考え方が大切で、対等に接することが私たちに必要だと思う。だから健体者といろいろな種類の障害を持つ人が、みんなで同じ人間として参加できるスポーツを考えてみようと思う。

こうして、当初、「障害者のためのスポーツを考えよう」との発想から出発した子どもたちは、彼の「健体者といろいろな種類の障害を持つ人が、みんなで同じ人間として参加できるスポーツを」との提案に触発される中で、「障害者も健体者も同じコートの中で、共に楽しめるスポーツはないか」という発想へと一歩踏みだしていった。

実際にこの「バスケットバレー」を体験し、プレーした子どもは、次のように感想を綴っている。

今日やったスポーツは、いろいろな身障者ができるものだったけど、考えるのは大変だっただろう。同じような障害を持つ人たちにできるスポーツなら少しは楽かもしれないけれど、個人個人違った障害を持つ人たちにできるスポーツとなると、ある一方の人ができても、こっちの人ができないと、なかなか配置や内容など困ってしまうだろうし、他にも問題が次々とでてくるだろう。でも、そういうことであきらめてしまえば、これからの健体者と身障者が共存していけるような社会の実現は難しくなってしまうだろう。だから、きちんと考えて創らなければならない。

障害者スポーツを創ることに限らず、日常の生活の中でも同じことが言えるだろう。身障者の人を「かわいそう」と思うことは悪いとは言わないけれど、「かわいそう」と思うだけで実際に実行することがなかったり、実行しても、それがあわれに思ってする事ならば相手にとって失礼になる。あわれみや同情ではなく、同じ人間としてつきあっていくべきだろう。それが共存の社会への道となるだろう。

この子どももまた、障害者のためのスポーツを創るという課題に迫ることを通じて「健体者と障害者が共存していける社会のあり方」に目を向けつつある生徒の一人と言ってよい。

②自分たちの住んでいる地域社会における「障害者スポーツ」の施策状況について調べるグループ

本や資料などから、福祉先進国と呼ばれるヨーロッパの国々の障害者スポーツに対する取り組みや、日本の国としての施策や国レベルでの障害者スポーツの状況を知った子どもたちの中に、それでは身近な私たちが住んでいる地域ではどんな状態なのかを調べてみようという要求が高まり、まず山口市の市役所を訪ねて話を聞くことにした。

ところが、予想に反して「市独自ではこれといった障害者スポーツへの取り組みはしていません」との答えに、子どもたちは困惑した。そこで今度は、「山口県ではどうだろうか」という疑問をもって障害福祉課を訪ねることにした。この簡単には引き下がらないというこだわりに、校外学習（協合学習のひとつ）で学んだ、わからないことは納得のいくまで調べるというたくましさを見るような気がした。

事前に担当者に電話を入れ、面会の趣旨を説明し訪問の約束を取り付けるということも彼ら自身で行っている。

中学生のまじめな学習態度に、障害福祉課の担当の方も懇切丁寧にお話をして下さり、子どもたちも満足の笑顔で帰ってきた。さまざまな資料やパンフレットを用意していただき、説明もしていただいたおかげで彼らにとっても満足のいく取り組みであった。さらに「ほほえみの石川大会」というスローガンのもと、石川県で開催された全国障害者スポーツ大会のビデオまで貸し出して下さり、他のグループの子どもたちにも参考になった。このビデオは、後日、学園祭のセミナー発表の時にも放映し、大いに役立てることができた。

ある子どもは調査の結果をこうまとめている。

資料などから、たくさんの種目があることがわかりました。そこで私たちは山口市の障害者スポーツへの取り組みについて調べることにしました。

まず、山口市が主催となって行われた過去の障害者スポーツの大会について尋ねたところ、そういったものはないとのことでした。そこで県へと枠を広げることにしました。

県下では過去に３１回も身体障害者体育大会が行われています。競歩、マラソン、砲丸投げ、様々な競技が実施されていますが、参加人数は減りつつあります。

なぜでしょうか。役員の方のお話しでは、「障害者だけを集めて競技をするからではないだろうか。私たちが同じ学年の人たちだけでいつも同じ競技をしてもおもしろくないように。」とのことでした。

確かに展開が少ないのかも知れません。役員の方々の夢は、障害の有無を越えた大会をすることだそうです。「障害」という壁をなくすこと、これが今後の大きな課題だと改めて思いました。

山口県ではこれまで３１回も県大会を開催し、障害者スポーツにも力を入れていること。また毎年１１月に山口市で車椅子マラソンの大会を開催し、県内外からも選手が参加していること。しかしながら、県大会の参加者が減少傾向にあること、などを紹介している。

子どもたちが話しを聞いた中で印象深いこととしてあげているのは、「参加している障害者の人たちに何か不満があるのではないか。それはひょっとすると障害者の人たちだけを集めて競技するからではないだろうか。」ということである。この話は、わたし自身にも非常に興味深い話であり、障害者スポーツの今後のあり方を考えるとき、一つの指針となるのではないだろうか。

障害の有無を越えた大会をすることが役員の方の夢だということを紹介しているこの子どもにもやはり同じような思いがきっとあるのであり、だからこそ「『障害』という壁をなくすことが今後の大きな課題だと改めて思いました」と書いているのである。

③文献などから障害者スポーツの今後のあり方を調べるグループ

ここに示した写真は、「障害者スポーツを広めるにはどうしたらよいか」という自分なりの課題をもち、障害者スポーツに関する資料や文献などから調べていったことをポスターという形にまとめたものである（この発表方法については後述する）。

障害者スポーツが抱える問題点として、①重度障害者の参加できる競技が少ない、②技術・レベルの向上を望むので大衆化・民衆化されない、③障害者スポーツを伝えるものが少ない、④指導者や施設の不足、などをあげている。

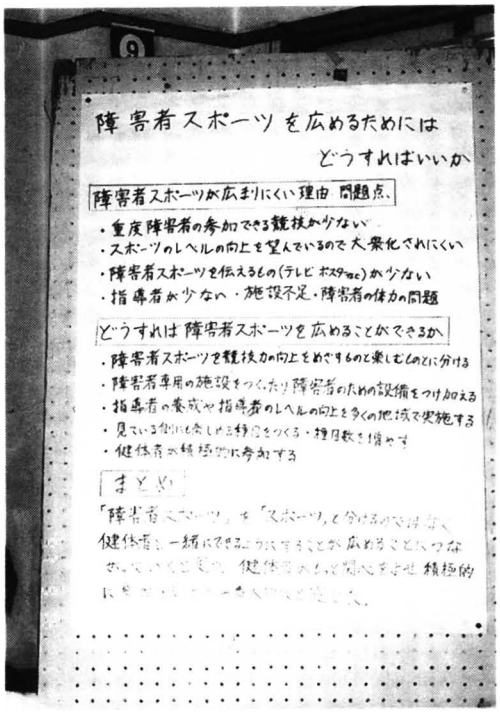
そして、障害者スポーツを広めていく対策として、①障害者にとって、スポーツを楽しむものと競技力の向上をめざすものとに分けた活動を進めていくこと、②施設・設備の充実、③指導者の養成、④見て楽しめる種目を考える、などをあげている。

さらに、日本はアジアの中では障害者スポーツは進んでいるが、欧米に比べるとまだま

だ足りないことが多く、そのことが国だけでなく健体者の関心が薄いことにつながっているのではないかと捉えている。

また別の子どもは、障害者が「何を、だれと、どこで」しているかというアンケート結果を例に出して、多くの人が「散歩」「ラジオ体操」程度の運動という貧しいものであり、多くの人が「一人ないしは二人程度で行う」という淋しいものであり、多くの人が「道路」「家の庭」でという粗末なものという、「貧しく、淋しく、粗末なもの」という捉え方で日本の障害者スポーツの現状を見ている。障害者と健体者が共存し、互いに認め合い助け合っていく社会を築くことこそが私たちの課題であり、この課題を解決することにより、欧州のように「障害者スポーツの先進国」と呼ばれるようになるのであり、それを願うばかりである、と結論づけている。

子どもの感想を紹介しよう。



今の日本は確かに経済大国であるが、まだ『障害者スポーツ』の面ではかなり遅れているという。このことを知って僕はがっかりした。なぜこんな状態なのか。それは『心の豊かさ』がないからではないだろうか。

ヨーロッパでは障害者スポーツに対する考え方がしっかりしていて、障害者も同じ人間という思いが高まっている。しかし、日本では『障害者は特別な人』という固定観念が消えていない。どうしたら、私たち日本人は障害者に対する考え方を改善できるだろうか。

今回の取り組みを終えてある子どもが次のように書いた感想文が印象深く心に残っている。

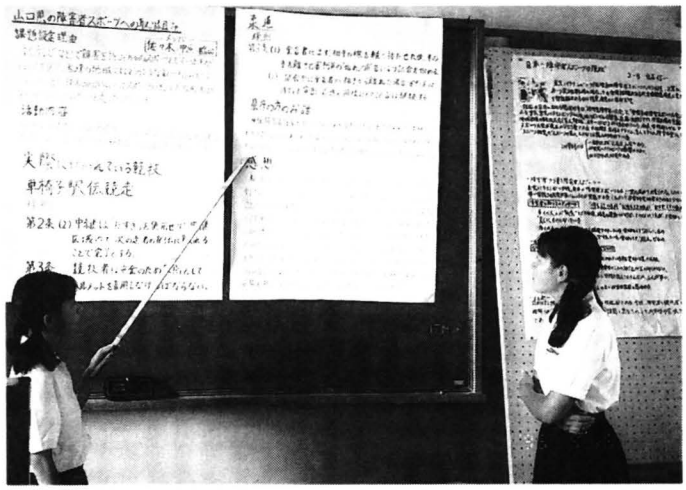
自分の課題を追究したことにより、自分の中で今までとは違う考え方を持つことができるようになった。正直に言って、今までは少し障害者に対して自分たちとは違うというような偏見のようなものがあったけど、今は障害者も健体

者もまったく同じ人間であり、呼び分けるのもおかしいし、差別なんてもってのほかと思えるようになってきた。あとは、言葉だけではなく、行動に移すことができるかどうかである。

多くの子どもが、障害者とスポーツは無縁なものと考えていたが、今回の学習により、スポーツは障害者にとって生きる支えとなるものであり、それゆえ障害者にとってのスポーツ施策がいかにあるべきかを考えるきっかけとなったことと思う。

これまで、セミナー学習における子どもたちの姿を紹介しながらこの実践を考察してきた。最後に、子どもたちが調べる学習を通して摑み取ってきたことをどのようにして他の子どもたちに伝えていったのか、その成果の発表の方法について説明しておきたい。

④セミナー学習の成果を発表する場としての学園祭



前期のセミナー学習の成果を発表する場として、毎年９月に行われる学園祭がある。この学園祭とは、先述の協合学習のひとつで、文化部門、広場部門、体育部門の３部門で成り立っている。このうちの文化部門で発表する機会が与えられる。発表の方法としては、ステージ発表、展示発表、ポスターセッションのうちどれかの形式をとっている。今回の「障害者スポーツを考える」の成果の発表はこのうちのポスターセッションによるものである。発表者は自分たちが伝えたいことを分かりやすくポスター（大判用紙）に掲げ、それをもとにして説明する。他の子どもたちは自分が聞いてみたい、知りたい講座のポスターが掲示してある教室に行き発表者の説明を聞くというものである。

上の写真は、②で紹介したグループが自分たちの取り組んできたことをポスターにしてまとめ発表している様子である。

この方法は、自分が本当に聞きたい、知りたい場所へ自分が決めて行って話しを聞くということで、説明する側と聞く側の一体感が生まれ、学習の効果もあがると思われる。子どもは、自分が学習してわかったことは何とかして友達に伝えたいと思うものであり、説明を聞く側は、友達がセミナー学習の中で一体どんな取り組みをしてきたのかを知りたいと思うものである。実際に障害者のためのスポーツを自分たちなりに創ったり、体験したりして感じたことや、聞き取り調査をしてわかったこと、文献を通してこれからの障害者スポーツのあり方として考えたことなどを、堂々と発表する姿に確かな学びを感じとることができた。

また、このポスターセッションの機会を通して、他のセミナー講座を選択した者がどんな取り組みをし、どんな学びをしたのかという情報を交流し合うことができるという良さもある。その意味において、このポスターセッションはセミナー学習のまとめの活動の場（成果を整理し、交流し合う場）として意義ある活動といえる。

4．実践をふりかえって

２度のセミナー学習で合計１６時間のささやかな取り組みであったが、子どもたちが自分なりの「かかわりとこだわり」を持って学んでいく姿に、自ら学ぶことの楽しさをあらためて見いだすことができたような気がする。

「障害者にとってスポーツとは何か。健体者である自分たちと障害をもつ人々が共に豊かに暮らしていくために自分にできることは何か。」を子どもと共に考えてみたいと出発した今回の取り組みであったが、実に多くのことを学ぶことができたのではないかと思う。

障害者にとってのスポーツは、それはまさに彼らにとって生きていく支えであり、生きていく勇気が湧いてくるものなのである。そして残念なことに、日本の障害者に対するスポーツ施策は欧米のそれと比べると実に不十分なものであるということを知った子どもたちは、それを自分たち自身の問題だと受けとめ、より豊かな社会の実現に向けて自分に何ができるのかを考えることができたのではないだろうか。そして何よりも、わたし自身が子どもたちの学びから多くのことを学ぶことができたことをうれしく思っている。

今一度、３年生男子のセミナー学習を終えての思いを全文で紹介し、まとめとしたい。

障害をもつ人というのは、先天的なものと後天的なもの、それから、とても重い重度の障害をもつ人等いろんな人がいると思うが、大切な事はそういう人たちみんなが僕たちと同じ地球上で、同じ国の中で生きている、人間はみんな支え合って生きているんだという事だと思う。障害者の「生きている」という精神力から生まれるスポーツへの可能性ははかり知れないものがあり、健康な人と共にスポーツをしたいという願いは、いろんな人が持っているのではないかと思う。僕は、今まで障害者にはスポーツなんてできないという固定観念があったが、何年か前、テレビで車椅子に乗っている人たちが一生懸命バスケットボールをしている姿を見て、そういう考え方を持っていた自分がはずかしくなった。事故等によって体に大きな障害を持った人はたくさんいると思うが、そういう人たちがスポーツという「身体運動」を通して生きる事への情熱や喜びを得て、その可能性を見い出せるのなら、障害者にとってのスポーツはとても素晴らしく偉大なものだと思う。自分が障害者のスポーツに関わるのは、中学生の段階では難しい事だが、障害者スポーツのあり方についての考え方は、自分なりにしっかりと持ち続けたいと思う。今は障害者と健体者が共にスポーツを通してふれあえる機会の実現を心から願っている。

註

1). 芝田徳造，「障害者にもスポーツのよろこびを」，体育科教育，1987年,10月号
2). 芝田徳造，「障害者スポーツ－－京都の挑戦」，かもがわ出版,1989年
3). 芝田徳造，「スポーツは生きる力」，民衆社，1986年
4). 川添邦俊，正木健雄，矢部京之助編，「障害児の体育」，大修館書店，1981年
5). 日本広報協会，「ともに育ち、学び、支え合う社会を」
6). 山口県，「環境整備の手引き、共に生きる街づくりのために」，1985年
7). 山口県，「街へ出よう！車椅子ガイドブック」，1982年
8). 山口県，「第31回山口県身体障害者体育大会（陸上大会）プログラム」，1993年